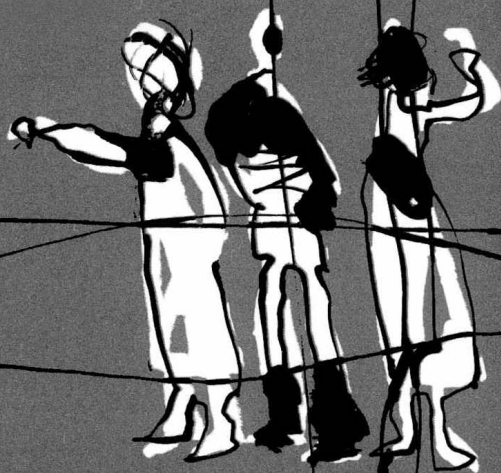




われに背くとも



われに背くとも
芹沢光治良

新潮社版

われに^{そむ}背くとも

昭和45年 6月15日 発行
昭和50年 1月30日 15刷

定価 850 円

著 者 ^{せり ざわ こう じろう} 芹沢光治良

発行者 佐藤 亮一

発行所 ^{株式} 新潮社

郵便番号 162
東京都新宿区矢来町71
振替 東京 4—808

印刷・株式会社光邦 製本・神田加藤製本
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
© by Kôjirô Serizawa. Printed in Japan 1970

われに背くとも

装帧者

生沢
朗

序 章

紀尾井町の坂の上に、翼を大きく張ったような巨大なホテルの胸に、すべりこむようにして、自動車が停車した。

「地下駐車場にあずけて来ますから……お父さまは、ここで待っていて——」

そう、省三をおろすなり、清子きよこはコロナで走り去った。

省三のおり立ったそばに、十二、三メートルもある大きな立て看板があった。みごとな手蹟で、「井川健一氏、山辺省三氏、芸術院賞受賞祝賀会場」としてある。

省三は目をそらせた。これだから、最後まで祝賀会を辞退したのにという思いがした。

自動車が次々にすいこまれるように到着して、客が降りる。顔を見られるのが気はずかしくて、省三は急いでドアをはいり、ホールの片隅の円柱のかげの椅子に腰をおろして、清子を待った。

「先生、お待ちしました、どうぞこちらへ——」

遠く奥の方から、顔見知りの若い記者が小走りして来た。

「いま娘がくるまをおいて来るから——」

「お嬢様なら、すぐご案内しますから、先生は会場へいらして下さい。井川先生はもうおいででございますし、皆さん、お待ちしています」

薄暗くて、広いホールだ。ロビーの先に会場の芙蓉の間があるらしく、そちらは明るい。その入口の受付に、出版社の若い女子社員が数人、署名簿を前にしてならんでいた。一人が大きな牡丹の造花を、省三の胸に暗れがましくつけた。

今夜は己れを殺して、主催者の操り人形になるのだと、省三は自ら言い聴かせた。

芸術院賞がどんなものか、受賞するまで、実は知らなかった。筆を持つ者にとり、最高の榮譽だからとて、先ず教え子たちが騒ぎたてて、祝賀会を開こうとした。省三はジャーナリズムの騒ぎに一切耳をふさいで、固辞した。ただこの祝賀会だけは辞わりきれなかった。その年の芸術院賞の文学部門では、受賞者は小説家の井川健一と翻訳家の省三の二人で、しかも、その出版社が二人の出版元である関係上、省三が辞われれば、井川も祝賀会ができないと言われた。

ひとに迷惑をかけないように生きたい——それが彼の生活信条であるから、引受けたのだが、当の井川が胸に造花をつけて、和服に盛装した夫人と令嬢を伴って、そばから、

「山辺さん、妻です」と、紹介した。

「お目出度うございます、先生、奥様はおいでになりませんか？」

「娘が参りました」と、答えた時に、古い友人が省三に握手した。

その間に井川が夫人に、省三の妻が亡くなったことを耳打ちしたので、夫人を赤面させないですんだ。

実際、数年ぶりに会うような旧友がたくさん集まって、おどろかせた。そのなかで、思いがけない土屋が、特徴のある大きい目をくりくりさせながら、

「山辺さん、吉田さんが亡くなりましたよ。私も二日前に知って、驚いたが——」

「吉田さん——」どの吉田さんか、訊き質そうとした時には、もう他の友人が握手していた。

吉田さんが亡くなったというが、誰であるか、省三は思い当らない。土屋に問おうとしたが、次の友人と握手している間に、彼は客たちのなかにまぎれて、見当らない。

土屋は旧制の中学校の二年後輩であるが、さして親しくはない。十数年前に銀座裏に画廊をもつて、兼業に画商をはじめたと、通知があつて、画廊びらきに行き、何十年ぶりかで会ってから、その後、美術館で偶然に数回あつたぐらいだ。従つて、受賞を祝いにわざわざ来る仲ではなく、吉田さんの死を知らせるために、この会を利用したように思われるが、その吉田という人物に、心当りが無い……。

省三はなにか心が落着かなかつた。

華やかな祝宴に出て、喜びをのべる代りに、不吉な他人の死を告げるとは、非常識だが、土屋は決して非常識な男ではない。K大学出で大貿易会社の部長をつとめ、退社後も、画商をするかたわら、手広く事業をしているらしい、服装なども品がよくて、五十代になつたばかりに見える。その彼が、わざわざ真面目に告げたのだが、その吉田とは誰であるか。

省三は記憶力がぶつたのかと、われながら不快であつた。土屋を探して、訊きたいが、友人がむらがるようにして話しかけるので、その場をはなれられない。

そればかりか、清子がいろいろの人をつれて来ては、紹介する。留学中に、外国で世話になつた外交官、大蔵省の役人、新聞社の特派員……等、みな省三の方から出向いて感謝すべき人々だが、この機会に面識を得たいとて、省三に祝詞を浴びせかける――。

省三は戸惑^{とまど}つていたが、ようやく主催者が来賓を会場の方へ促してから、

「先生、会場の入口で、お客様を迎えて下さい」と、注意した。

会場の入口に、井川とならんで、迎えたが、気はずかしさと申訳なさで、頭をあげていられな

い。小説家の井川が文壇の巨匠の一人であるためか、出席者が多く、二百数十名もあろうか、入口が混雑するほどの人だ。その客のうしろの方に、土屋を認めて、省三は迎えの席をはなれ、声をおとして呼びかけた。

「土屋君、さっき吉田さんが亡くなったと言っていたが、吉田さんて、どなたですか」

「万寿子^{マンシュ}さんのご主人ですよ」

「万寿子さん——」

「そうですね……高見さんにも、すっかりご無沙汰になって……二日前にこちらで聞いて、驚きました。あの方も高見^{タカミ}さんの方も、敗戦後は、変られて……お気の毒です……」

省三は言葉が出なかった。四十年近く耳になかった名前——初恋というより、学生時代から数年間、生を賭すようにして愛しあった女性の名前に、目潰^{めつぶ}しされたように、一瞬目まいがして、土屋が大きくなばたきをしながら話すことが、耳に入らないくらいであった。

高見万寿子——一生忘れることができない女である筈だったが、この三十年は思い出したこともなかった……。

省三はみんなのあとにしたがって、会場へはいった。広々とした会場は、正面の舞台の上の金屏風が映えるのか、明るく輝いて、目ばゆいばかりだ。主催者が井川と省三とを、奥に案内したが、省三は立っていられなくて、右側の壁ぎわの椅子にかけて、目を閉じた。

去年の晩春、妻の英子が急死した時、わが一生もこれでおわったものときめた。それ故、六十五歳の定年には、まだ一、二年あったが、あっさり大学に辞表を出して、語学教師の職をはなれた。同時にフランス語の翻訳からも手をひいた。言ってみれば、人生の舞台で目立たない端役を演じて、誰にも気づかれないように、とほとば揚幕のなかへ引っ込んだつもりであった。ところ

が、今度の受賞は、揚幕のなから再び呼びもとそうとするアンコールの声に似ている……。

省三の胸にはいろいろの想念が去来した。

——わが一生は、結局、英子をすてないために、英子にあわせて演じたつまらない役であったが、万寿子さんであつたら、ちがつた役を演ずることができたのではなからうか……彼女は今来日本の女性史を書く希望をいだいて、女子大学でも社会学を学び、女子大学を出るなりドイツに留学したほどだから、彼女と生活をともにできたら、自分の生き方も確かに変わっていたらうが、彼女はドイツにわたつて二年目に、軌道から外れた衛星のように、わが世界から消えてしまった。そして、自分も揚幕のかげにかくれたいま、しかも、揚幕から再び舞台に呼びもとそうとするような騒々しい祝いの夜、何故土屋は彼女の名を、この胸にささやいたのだろうか……。

祝賀会ははじまっていた。芸術院の文学部長である著名な作家が、本年度の受賞者の詮衡にあたり、井川と省三が満場一致で決定した経過を語つて、二人の文学的業績をたたえた。次に、文壇を代表して、文芸家協会の理事長の、これもまた著名な作家が、井川の受賞作品を、解説を加えて絶讃してから、省三の訳著を一つ一つ挙げて、如何に日本の現代文学の発展に資したかを、述べた——。

省三は立ち上つて、祝詞を受けていたが、全身から力がぬけたやうで、すぐに椅子にかけて、頭を垂れた。

——自分と同様に、土屋も学生時代高見家から学費の援助を受けていた。彼は一時高見家からK大学に通学したから、自分たちの恋愛をよく識っていたのだらう……そうだった、彼女がベルリンで結婚を決意したことを、知らせてくれたのは、彼だった。東大の研究室に訪ねて来て——奥さんに、万寿子さんと山辺さんの結婚をみとめてやって下さいと頼んだら、万寿子は吉田さん

と結婚します。いつか未亡人にでもなった時、考えましよう、答えたんですと、顔面神経をふるわせた。

「山辺先生、もうすぐ挨拶の番ですよ」

司会者が身をかめて、省三に耳打ちした。

壇上の井川は挨拶をおわるころであった。

「今夕は御多用中にも拘らず、かくも多くの方々に、お祝いいただきまして、感謝にたえません。ありがとうございます」

これだけ言って、省三は壇をおりるつもりでいた。のどはからからで、疲労感で話す力もなかった。

しかし、広間の中央に花々がもられ、ビールや料理の山がならんだ白いテーブルをかこんで、じつと壇上を見上げる無数の視線に射られると、立ち竦んで、壇上で動かれなかった。

「私は日頃、ひとに迷惑をかけないように生きたいということをもットーにして暮しましたのに、こんな風に、多くの方々に迷惑をかけることになって、自ら恥じております。実は、社会の片隅で目立たないようにさきやかに暮していましたが、昨年教職も辞し、翻訳もやめて、言うなれば、人生の舞台から退いて行く花道を、とぼとぼ揚幕へ向って身を没する時に、今度の受賞で、これは下座音楽としては、華々しすぎて、戸惑っている次第です。しかし、この芸術院賞は、アンドレ・ジードやマルタン・デュ・ガールやロマン・ロランの原作に授けられたので、私はその余光に浴したのにすぎません、その点、引っこみに相応しい下座音楽かも知れません……」

そう言いながら、省三は己れの一生もこんなものであったかと、空しさがふと胸をかすめた。若い日に、何年間も万寿子と将来を語り、はげましあって、希った自分達の一生は、こんなもの

ではなかったと、悔恨の情が腹の底からふきあげた。

「しかし、私は未練がましく、往生際のわるい人間のようなのです。親しいみなさんが、こんなにたくさんお祝いに集まって下さると、揚幕へ送る下座音楽を、花道から舞台へもう一度呼びもどすアンコールの声のように、聞きちがえるのです。と、申すのは、私は多年翻訳をしましたが、私自身の生きたしるしは、何一つしなかったようで、悲しくて、花道の引っ込みがつきません。かつて詩や創作をはげんだが、暮しのために翻訳をはじめて、意気地なく一生をおわることになりましたけれど……アンコールによって再び人生の舞台に呼びもどされて、短い時間でも、端役を演ずるならば、今度はフランス人に扮しないで、真実の己れを表現したいものです。詩心は衰え創作力も枯渇していても、長い人生の経験をもとに、メモアルか随想ならば立派に書けそうに思われます、モンテエニユの随想録のようなものを書きたいと、この壇上にあがってから、切に思うようになりました。それ故、受賞したことが、この瞬間から初めて喜べるようになりました」

こんなことを言うのではないと、自ら狼狽して、急いで降壇した。

さかんに拍手がおこったが、はずかしさに全身汗にぬれていた。最後に、受賞者に花環の贈呈があつてから、出版協会長の音頭で、乾杯があつて、ようやく飲物が出て懇談になった。

省三もビールを手にして、椅子に休んでもいられなかった。旧友の祝杯をうけ、写真班の前にも立たされた。

間もなく人波をわけるようにして、土屋が近づき、

「山辺さん、御挨拶をうかがつて胸がいっぱいになりました、学生時代を思い出して——」と、おろおろしながら言った。

省三は言葉もなく、卓上のウイスキーを土屋にすすめたが、相手はなおもつづけた。

「僕も山辺さんと同様、ただ貧乏だということで、高見家の皆さんにいつも輕蔑されてね……勉強部屋でゴッホの画集を見ているのが見つかつて、学生の分際で道楽氣を出すような奴には、学費は出さんと、頭から怒鳴られました……山辺さんも社会主義者だからと言って、出入りを差しとめられたそうですね。万寿子さんのすぐ上の久君がK大で同級生で、みな話してくれましたが……あの家では、僕たち貧乏学生の理解者は夫人だけでしたが、その夫人でさえ、僕を牛込の人相見の処へつれて行きました。高見さんに怒鳴られてから間もなく……僕の援助をうち切るかどうか、相談したのでしょうか、人相見の親爺が——勝氣な青年だから、面倒を見てやった方がいいと、答えたので、僕は大学を中退しませんでしたけれど、高見さんは僕の顔を見るのもいやだと言って、夕食も食堂でいっしょにさせなくなつて……たいした侮辱でした。山辺さんや僕のように、漁師や百姓の子は猫か犬の子のように、穢^{けが}らわしかったのですね……」

省三は一つ一つ思い当ることがあった。高見夫人は、母だと思つて遠慮するなど、言ってくれたが、東大の二年になつたばかりの頃、国鉄の市ヶ谷駅に来るようにとの速達で、指定の時間に出向くと、その觀相家の処へ案内した。今の日仏学院の上で、谷をへだてて法政大学を望める二階家の奥座敷で、脂ぎつた觀相家が顔をじろじろ觀た後、省三に座をはずさせて、夫人に結果を知らせたらしかった。その一日おいて、万寿子から省三に速達が届いたが——ただの友人として読書の指導を受けるのも望ましくないから、徐々に文通や交際もやめるように、母から申しつかったと、告げて来た。一週間もしないで、夫人から速達で新橋駅へ呼び出されたが、夫人は旅発つところで、省三に手荷物をわたして、見送らせながら——主人は前から山辺さんを家へ出入りさせてはならぬと、厳しく命じておりましたが、最近では山辺さんと名が耳にはいっても、機嫌を損ずるから、手紙もよこさないように……と、言つた。——こんな苦い思い出を、省三は振払つ

たが、土屋はなおもつづけていた。

「……万寿子さんがベルリンに行ったのは、高見さんからすすめられる結婚を逃げるためだったそうですね、そして、向うで山辺さんを待っていたって……それなのに」

「その問題で、君が研究室へ来てくれたね……あれ以来、あの人のことも疎遠になって……さあ、ウイスキーを飲んで下さい」

「え、あれから、お会いしていないんですか」

「もちろん、高見さんのどなたにも……第一、あの人の姓が吉田であることも、さっき君から聞いて、初めて知ったくらいだもの……」

土屋は呆れた顔をしたが、省三はビールのコップを片手にしたまま、他の客の方へ行った。

その夜は、実際思いがけない出席者が多かった。省三は客のあいだを、お札をのべてまわったが、誰がこの人のアドレスを主催者に知らせたか、訝いぶった。この人にまで迷惑をかけたかと、頭を垂れた者もある。

しかし、パリ住いの木下画伯に握手された時には、瞬間、狐につままれたように、つくづく顔を見た。

「君、日本だったの——」

「数日前に……東京と関西で個展をして、来月はじめ帰るつもりです。今度は息子もいっしょです」

「ご子息も大きくなったでしょう」

「もう大学生です、僕を見下ろすほどのびてしまって……日本の空気を吸いたいと言うから、つれて来ましたが、戸惑っています……先生も、お嬢さんがお帰りになって、ご安心ですね」

「ああ、娘が今夜のこと、知らせましたか」

「いいえ、先程お目にかかって、東京だということを知りましたが、お嬢さんもお父さんのそばの方がいいとみえて、見ちがえるほど美しくなりましたね」

画伯はサンフランシスコ条約のむすばれた年の秋、家族をともなつてパリに移り、モンパルナスの裏街に住みついている。省三が或る年、世界翻訳者会議に出席の帰途、パリに留学中の清子を訪ねたところ、時々、木下夫人に招かれて日本食のご馳走になるからとて、省三はお礼にアトリエを訪ねたことがある。そのアトリエが惨めなほど粗末な部屋で、カーテンで二部屋に仕切つて、家族四人で暮っていたが、家具らしいものもなく、パリの芸術家の生活のきびしさが、一目でせまった。東京では名前のとおった画家として、構えて暮した木下夫妻が、パリで真の芸術家らしく必死に精進することに、省三は感動して、すぐ親しくなり、木下も省三をパリの人々に、わが伯父だと紹介するほどだった。

木下画伯と立話しているところへ、A新聞の文化部長が、省三の耳もとに顔をよせて、

「先生、お願いがあるんですが」と、言った。

省三は部長を会場の隅の方へ誘つて、壁に沿つてならんだ椅子にかけた。立ってられないほど疲れていた。

「さきほどご挨拶のなかで、話していられた随想録は、出版なさるところ、もうおきまりですか」

「まだ書くかどうか、わからないよ」

「こんなところでお願いしては申し訳ありませんが、^{うち}自社の新聞に連載してくれませんか、どんなに長くても——」

「まだ書くかどうか分からないと、言つたらう」

「編集局長と相談して、近くお願いに上ります」

そう言ひのこして、はなれて行く記者に、省三はことわる氣力もなく、椅子から立てなかつた。そして、息子の光一も嫁も来ていないようだが、どうしたのか、困つた奴だと、落着かない氣持で思つていた。

祝賀会もようやく閉じる時刻になつて、井川夫妻が引きあげるのを見て、省三は清子を促して歸ることにした。

「くるまは、あした取りに来てでもいいだらう。X社の自動車で送つてもらつて——」

「大丈夫よ、そのつもりで、葡萄酒もいただかなかつたから——」
清子は駐車場の方へ身軽く小走りして行つたが、省三は吹きつける寒い風に、背をまるく向けて待った。ボーイが見かねて、駐車場へマイクで——山辺先生のおくるま、玄関で先生がお待ちですと、二、三回アナウンスしたが、それをとどめに行けないほど、疲れ切つて、強い北風に吹きとばされそうであつた。やがて、清子のくるまがとまつた。

運転台にのつて、安全枕に頭をおき、目を閉じた。ピアニストはかんがいといと、自慢するとおり無事故で、用心深いから、睡つていても無事に家へつれて行つてくれる。

「お父さま、盛大でしたわね、よかつたわね」

「うん」

「うれしかったわ、バリでお世話になつた方々に、いっぺんにお会いできたんですもの。どうしてみなさん、おいで下すつたんでしよう、驚いたわ。日本へ歸るとどなたも偉くなつて……文化アタッシェのAさんは国立劇場の理事長に、經濟參事官のBさんは大藏省の局長さんに、日銀の

Cさんは弁護士になっていたのよ。Aさんは顔を見るなり——見違えたよ、東京へ帰ったら綺麗になったな、なんて、おっしゃるでしょう？　するとBさんが——パリでは貧乏留学生だったが、東京では山辺さんの令嬢だものなあ、なんて揶揄するんですもの……」

省三は快く聞いていた。パリで清子がどんなふうに住んだのかで生きたか、想像ができて——。

「奥様方もいっしょにいらして下さって、ありがたかったわね、お父さま。どなたも和服でしたが、和服は目がさめるように美しいわね」

「木下さんも言ってたよ、清子がきれいになって見ちがえたって——」

「パリの生活は、わたしもお化粧どころではなかったけれど、木下さんの小母さまなど大変よ。

小父さまも賞をとってないから、日本へ来ても、新聞が黙殺するし……」

そう、しんみり言って、しばらく黙っていた。

「Aさんから、紹介されたけれど、土屋さんはお父さまの中学の頃からお友達ですってね。音楽会の切符は何枚でも持って来い、引受けるなんて、言っていましたわ」

「光一は会場に見かけなかったようだね」

「お義姉さまは出席すると電話がありました、坊やが急に熱でも出したのでしょうか……ねえ、お母さまが、ご丈夫でしたら、お出掛けになったかしら」

「出ないな」

冷たい省三の声に、清子ははっとした。音楽会をすませ、一周忌を迎えるまでは、母のことは口にしまいと、帰国以来歯を喰いしぼっていたことを、自ら破ったのが悔いられた。